

学力低下の底流にあるもの

センター協力研究員（品川区立荏原第三中学校校長） 楚 阪 博

「よく遊び、よく学べ」という言葉は、現代社会では、何歳頃までに適用できる言葉なのであろうか。今の日本の社会では、「もっと遊びたい」ということが言えない、許されない社会になりつつあるのではないだろうか。学校現場にいる者の視点から見える何かおかしい、考えなければいけないと思える点を2人の生徒の生き方から指摘してみたい。

A君、本校3年生の男子生徒である。彼はテニス部に所属し、部活動大好き人間である。高校入試は推薦で受験し合格した。入試面接前日までテニスコートに立って後輩の指導に当たっていたのである。もちろん入試翌日も練習に出ている。私は、入試日の近づいたある日の放課後、A君に聞いた。「毎回、練習に出てくれることはありがたいけれど、入試が近いんだから、終わってから出てきてくれればいいよ」と言ったら、「いいですよ。僕はテニスをやってから帰った方が家で集中できるんです。ご心配どうもありがとうございます」とさっぱりと言われてしまい、返す言葉がなかったのである。思えば、1・2年生が秋の新人戦に出場するために地域の民間会社のテニスコートを借りて練習した時にもY君だけでなく、他のテニス部の3年生も練習に協力してくれたのである。なかでもA君は同級生が塾に行く時間になると帰っていく中で、1週間毎日、練習開始から終わりまで残り、練習相手から最後のネットの片づけまで後輩と一緒にやってくれたのである。

後日、A君のお母さんと話すことがあった。聞くと家の生活も同じで部活動があった日となかった日とでは、落ち着きがまったく違うとのことであった。「入試が近づいてきたときは、さすがに私も落ちつきませんでしたでしたが、本人に言っても聞く耳を持たないし、テニスをしてきたときの顔をみた方が私の気持ちも落ちつきましたから、息子に任せることにしたのです。ダメだったときはそのときに一緒に考えればいいと割り切ることにしたのです」と言われ、「ああ、このお母さんはY君をよく見てくださっているなあ」と思った。

Bさん、同じく本校の1年生の女子生徒で、見かけと実態に大きなギャップを感じる生徒である。昨年6月、

1学年集団と一緒に移動教室に行った。レクリエーション係を担当し、特に、当日の活躍は目立っていた。整った顔立ちだけでなく、落ちついた振る舞いの中にも子どもらしい純真さを感じさせる行動をとっていた。言動がしっかりし、学級の仲間への指示の適切から利発さを感じさせたのである。しかし、数学の習熟度別学習で彼女の表情を見たときには驚いた。まったく自信のない顔をしており、事実、基礎ができていないのである。算数の基礎計算が正確にできないのである。今後、学力が伴わない彼女の言動は、他の生徒から指示されなくなることを憂い、補充学習指導を行い、学力アップさせようと声かけをした。しかし、「今日はちょっと」という感じでいつも逃げるのであった。2学期の終業式後、体育の評価が悪いことへの抗議の電話が家庭からあった。これがきっかけとなり、彼女の言動の背景がよく分かったのである。「授業はきちんと受けているのに成績が悪いのは何故か」という問いであった。体育の教諭に確認すると「授業には出ているが、まったく無気力で、真剣に取り組もうとしないし、課題の提出物も出していないから評価のしようがない」とのことであった。同時に他教科の授業の様子や担任が三者面談から得た情報なども集めて総合的に判断するとBさんは、毎日が時間に追われた生活であることが分かった。学校にいるときが緊張のとけている時間であった。帰宅後に費やしている習いものの時間が大きな比重を占めているのである。身体的・精神的な疲労が学習への気力低下を起し、学力不振を生じさせているのである。このBさんの学校と放課後の学びの両方が成り立たないのは、保護者の考え方に起因していると考えている。

A君、Bさんのような生徒は、特別な生徒ではない。A君、Bさん共に自分がやりたいことをやっているのである。学生時代は部活動、興味・関心のあるものに熱中した体験が必要である。やりたいことを十分やった結果、味わう満足感こそ、勉強へと向かう気分転換や意欲を起こさせるのである。まさに「よく遊び、よく学べ」の環境の保証であるが、その時、基礎学力の大切さを学校と家庭が共通認識し、助言できるかが問われている。